

優秀賞

Caminho (道)

滋賀県 川辺純子

「僕の前に道はない 僕の後ろに道は出来る」——高校生の時に学んだこの詩を、五一歳になる今年、私は何度も思い浮かべた。

昨年より教職の傍ら大学院で学んでいる。教育方法から国際理解に至る多様な学びの中で、私は「外国にルーツを持つ児童生徒」の存在と向き合うことになった。少子高齢化が進む日本の産業は、今や外国人の方々の労働力なしには成り立たない。最近では定住する方も多く、日本の大学に進学を希望する子どもたちも増えている。しかしその際ネットクになるのが「漢字」である。

そこで考えた。「漢字」が持つ成り立ちやつながりという特徴を、外国人の子どもたちの学びに生かせないだろうか。「鳥」という漢字は知らなくても、鳥の姿は知っている。はるか昔に鳥が占いに使われていたことを知れば、「鳥」の別の形である「ふるとり」がなぜ「誰」「推」「進」に使われているかを理解できるのではないだろうか。

興味を示してくれた東近江市のブラジル人学校ラチーノ学院と一緒に取り組むことにした。名前は「漢字フェスタ」。授業というよりも、みんなで漢字を楽しんでほしいという願いを込めた。当日は大学院生や高校生も参加してくれた。はじめはダンスと歌でスタート。漢字クイズを通じて成り立ちとつながりを学び、最後に自分の好きな漢字を手絵具で描いてアート作品を創った。子どもたちは笑顔で口々に「レガル!」と言ってくれた。ポルトガル語で「よかった」という褒め言葉だ。アンケートでは「前よりも漢字が好きになった」という生徒が九割を超えた。

秋風が吹き始め日常が戻ってきた。お祭りの余韻をどのように生かしたら良いのか。しかも緊急事態宣言が立ちはだかる。けれど子どもたちの学びを止めてはならない。「漢字って多文化なんだよなあ」という先輩の言葉に背中を押されながら、私は今、道なき道に踏み出す次の一步を模索している。